

会報
峠
とうげ

河井継之助記念館
友の会会報
第27号
2020.3

〈編集・発行〉
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目甲1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）

〈編集人〉
荒木法子 恩田富太
堀口晴夫 友の会事務局

〈構成・印刷〉
高速印刷株式会社

河井継之助記念館館長・郷土史家

稲川明雄さんを悼んで

河井継之助記念館友の会会長 下田 邦夫



菜の花忌にて
司馬遼太郎記念館館長・上村氏と稲川館長の遺影
を持つ友の会会長・下田邦夫

ことが印象的でした。今でも筆舌に尽くしがたい寂しさが込み上げてきます。郷土史家としての多大なご功績に対し心より敬意を表します。

作家、司馬遼太郎さんの『峠』が昭和四十一年から新聞に連載され、昭和四十三年には新潮社より『峠』

河井継之助記念館の稲川明雄館長が昨年十二月十二日、突如として立たれました。日頃から体調が優れず通院されていると伺い案じておりましたが、急なことでした。人と会う度に、眼鏡の奥から柔和な笑顔で接し、どんな質問にも独特の親しみやすい語り口で明解に話されていた

上下が刊行されました。もう半世紀が過ぎていきます。それまで地元・長岡では、河井継之助の名は良く知られていましたが、全国的には無名に近いものでした。しかし、この河井継之助を主人公にした歴史小説を通じて全国に知れ渡り、今でも司馬作品の中でも人気が高いものとなっ

ます。この『峠』があったからこそ、稲川さんは早くから持ち前の探求心で幕末のうねりのなかを考察し、国のかたち、長岡藩の行く末を憂い案ずる河井継之助の志を、武士としての美学を、ご自身の著書の中で見事に描かれたのです。

長岡と周辺の地域には、多くの歴史が埋もれています。稲川さんは生涯を通して、郷土史の第一人者として使命感を持ちつつ情熱を込めて活動され、講演や出版を通して多くの方々に感銘を与えられました。又、稲川さんは、継之助と同じように「自分が本当に良いと思ったこと」「自分が本当に正しいと思ったこと」を明らかにし、筋を通し、軸足がブレる事もなく、生き抜かれたのではないかと思われます。

昨年十二月八日には、河井継之助記念館の開館を記念する恒例の講演会が市内のホテルで開かれ、四二〇名を超える聴講者の前で、稲川さんは約三十分間「河井継之助と『峠』」をテーマにユーモアを交えながら話されました。続いて映画「峠 最後のサムライ」について、映画監督・小泉堯史氏と、キネマ旬報・前野裕一氏の対談が行われました。しかし、その四日後、稲川さんの訃報があり、思いもよらぬ事となってしまいました。稲川さんは「近頃、私の枕元に河井さんが立っている。夢の中に出

てくるんだよ」と言われ、まさか、と一笑に付していたところでした。時代こそ違うものの稲川さんの生き様、考え方が河井さんと一体になったように思えてなりません。

二月十二日は司馬遼太郎さんの命日で、この日の前後に毎年「菜の花忌」が開催されます。今年は東京有楽町の「よみうりホール」でシンポジウム。「土方歳三と河井継之助」「燃えよ剣」「峠」より」がテーマとなりました。当日のパネリストは映画監督の小泉堯史氏、作家の黒川博行氏、エッセイストで俳優の星野知子氏、磯田道史氏で会場は約一〇五〇名の司馬さんのファンで埋め尽くされました。稲川さんと毎回参加していましたが今回はかなわず遺影を胸に抱き聞き入りました。

後日、稲川さんのご自宅にお参りに伺った際、ご家族によれば、もつと若い時に司馬先生にお会いし、いろいろとお話しをしたかったと、くちグセのように言っておりましたとのこと。また、司馬さんの作品はほとんど読まれていた上に、緊急入院の際も鞆の中に文庫本『峠』上中下が入っており、後でお仏壇に供えられておりました。この秋には「峠 最後のサムライ」が全国で上映されます。稲川さんが公開前に逝かれたことは返す返すも残念です。